

コラム 黙ってははいられない；

原発ゼロはいいけれど…裏付けなしでは実現できない

はじめに

思い返せば、民主党政権になってから国の混迷がもたらされ、一向に回復の兆しは見られず悪くなる一方である。理由は何か。労組とか日教組とか元核マル派出身とかいった人たちに政権を任せたとすることが大きな原因ではないか。当時自民党の体たらくが指弾されていた時だったので、マニフェストに騙され議員の実態も判らぬままに民主党に投票したことが大きな過ちの一つであろう。

今、雨後のタケノコのように政策が似たり寄ったりの小政党ができています。今度の選挙では民主党が惨敗し、自民党が第一党になり、日本維新の会など第三極が勢力を伸ばしそうだとされているが、そうなるかどうか。新しい政党の実現は当然だが、3年前と同じ過ちを繰り返すことだけは避けたい。政党選択の要は「安定した政党なしには衰退しはじめた日本を取り戻すことは困難」というバランス感覚ではないだろうか。伝統的な政党で時代の要請に対応できる政党を中核にして、将来、重要な役割を果たすであろう第三極がその周辺に存在する形が、安定した日本を取り戻す最善の道かもしれない。

今日（平成24年11月24日）NHK日曜討論を聞いた。原発に関する質疑応答で各党、特に小政党の幹部が異口同音に実のない話を雄弁に語っていた。原子力なくしてこの国はどうやって生きていくのか、そのシナリオが全くないのである。選挙目当ての脱原発に乗せられては民主党の二の舞。

(1)野田総理は6月12日の記者会見で大飯3、4号の運転再開に関して「原発なくしてこの国は立ち行かぬ」と明言し、その結果、言葉通り運転再開に成功した。その時の記者会見の言明に感銘したものである。その舌の根が乾かぬうちに、30年代原発ゼロを閣議決定しようとしたが、産業界や外国の圧力に屈して30年代原発ゼロという表現は消えた。総理は民主党の代表でもある。原子力の必要性は判っていないながら、支持率低下や選挙結果を恐れてこういった振る舞いを示すのかもしれない。野田総理にはこれらの困難を裁くだけの政治力はないのであろう。民主党は政権獲得直後には原発50%のエネルギー政策を打ち出していた。福島事故があったとはいえ、いとも軽くこのように変節するとは。それを矛盾と感ぜない民主党や政権の感覚は誰が見ても納得できるものではない。こんな党に政権を与えたから、現在の混迷と衰退の引き金が引かれたのである。期待の改革が現在の混迷に変わったのは痛恨の極みである。

(2)民主党はそれだけに留まらない。11月16日の衆議院解散後のマニフェストに臆面もなく「徐々に原発を減らしていき、30年代にはゼロにする」という公約を掲げている。党の決定さえ反古にして、閣議決定から“原発ゼロ”を引っ込めたばかりなのに一体どうなっているのと問いたい。そうしないと選挙に勝てないというのが大方の見方。1回生議員の多くは、党の幹部にどうか脱原発を選挙公約にしてくれと懇願していたそうである。選挙と国の将来のどちらが重要と考えているのか。もうこれだけ失政を見せつけられると、民主党には早く退場してもらいたいと願うばかり。

(3)何度でも言わざるを得ないのが、福島事故をこのように最悪化したのは菅内閣である、ということ。事態を最悪化させておいて、反・脱原発を声高に叫ぶのはいわゆる“マッチポンプ”に近い行為で、国民をなめているか裏切っているようにしか思えない。原発事故を盾に、あるいは避難民の苦しさを思えば、などという表現を使いながら内閣支持率向上や選挙目当てのパフォーマンスを取るとは。日本人はこれを恥ずべき行為とみる。

(4)自然エネルギーの成功は反・脱原発が成立する必要条件である。しかし経済性を考慮すれば原発の代替には到底なれない。電力の質は最低。原子力を否定するための材料にしているだけ。

電力会社をつぶしたら日本は真っ暗である。原発を止めて火力に頼ると燃料費が大赤字なので、倒産しないために料金値上げが現実になってきた。九電は原発比率が高いため、年間4千億円の赤字。自然エネルギーになれば、200%の値上げ。産業の衰退が現実化し始めた。鉄鋼業が消えて良いのか。脱原発を机上の幻想だけで叫ぶ小政




電気代高騰が総選挙争点に＝脱原発のドイツー国民に不満、不公平感も

【ベルリン時事】東京電力福島第1原発の事故後、脱原発に転じ、再生可能エネルギーへの転換を急ぐドイツで、2013年から家庭の電気料金が大幅に上昇する。再生可能エネルギーの普及促進に向け、上乗せされる賦課金が47%増となるため、3人家族の家庭で年間約70ユーロ（約7200円）負担が増える見通し。エネルギー転換に理解を示してきた国民の間でも不満が募っており、来年初の連邦議会（下院）選挙（総選挙）の争点に浮上してきた。

賦課金はこれまでの1キロワット時当たり3.59ユーロセントから、5.28ユーロセントに引き上げられる。独メディアによると、年間3500キロワット時を消費する3



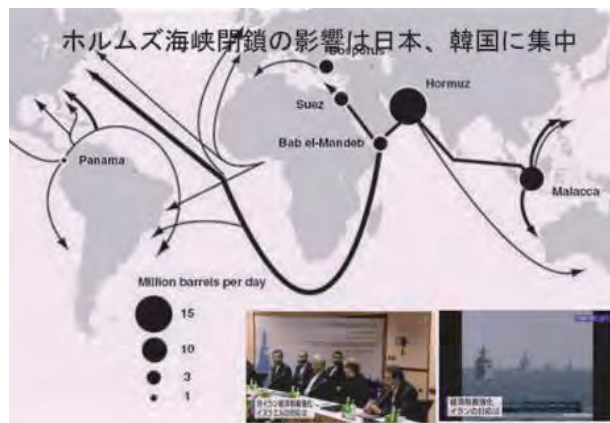
ドイツ東部フランクフルトの軍用飛行場跡地で建設が進む太陽光発電施設＝2011年11月25日撮影（EPA＝時事）

党。この国を潰したいのかと聞きたい。

ドイツやスペインの成功例が喧伝されてきたが、現在両国は電気料金や環境破壊などの点で行き詰まっており、その政策は破たんしつつある。ドイツでは原発が17基動いていながら、買い取り制度の廃止を決めた。

原発なくしてこの国が立ち行くと思っている政治家は、その技術的根拠を示す必要がある。だが、それを実行している反原発政治家はどこにもいない。古川前大臣の自然エネルギー擁護論は、実態を知らない机上の空論に過ぎなかった。要するに自然エネルギーで日本が立ち行く証左はどこにもないのである。反・脱原発を唱えるのは国の方向を誤る大きな矛盾である。せめて自民党のように3年間様子を見て決める、というのが納得のいく話ではないか。自民党が脱原発にすぎり国民に媚びようとしていない点は評価できる。ここには他党のようなまやかしかが見られない。

(5) 今日(11月24日)のNHKの“日曜討論”を聞いていて、出席者の多さにびっくりした。「雨後の竹の子」を連想させる少数政党の乱立。民主的であろうとすると、5人の政党も数百人の政党も同じ扱いをしなければならない。聞いていて新しい見解などどこにもない。中身の無い議論だけを声高に主張する少数政党の幹部達。責任を取らなくても良い政党が幻想をばらまき、何も知らない国民が幻想を持つ方向に誘導される、といった懸念を強く感じたが、これはNHKのせいではあるまい。小政党はほとんど“脱原発”である。藁にもすがる思いで“脱原発”を絶叫する。脱原発は格好の藁である。この人たちには日本の将来など知ったことではあるまい。この人たちは、日本は原発なくしてどうエネルギーを確保していくのか説明できない。ロシアから天然ガスを買うという。北方領土を占領して返還する気はさらさらないロシアに首根っこを押さえつけられてどうするのか。イランによってホルムズ海峡が封鎖されたらとたんに、日本は破たんする。タンカーの航行を保証してくれているのは米国であって、決して中国ではない。自然エネルギーどころではないのである。内に閉じた議論しかできない候補者には期待できない。



ロシアから天然ガスを買うという。北方領土を占領して返還する気はさらさらないロシアに首根っこを押さえつけられてどうするのか。イランによってホルムズ海峡が封鎖されたらとたんに、日本は破たんする。タンカーの航行を保証してくれているのは米国であって、決して中国ではない。自然エネルギーどころではないのである。内に閉じた議論しかできない候補者には期待できない。

(6) こう考えてくると、大変失礼な言い方だが、反・脱原発にすぎっている議員たちは落選の可能性を自ら証明しているようなものではないか。これはまさしく“自家撞着”である。矛盾を絵に描いたようなもので、そのような無責任な議員たちが当選したらどうなるか、もう民主党でこりこりではないだろうか。公明党もみんなの党も同じく脱原発である。今述べた疑問の答えは聞いたことがない。

(7) その日曜討論を聞いていて同時に感じたのは、NHKの老獪さである。二大政党は民主党と自民党だけである。他の多くの小政党はまず政権をとることはないだろう。無責任な発言をしても責任を取らなくても済む。有権者に媚びれば良いだけ。

NHKは原発に厳しい立場をずっと取っている。多くの有権者は、ほとんどの政党が原発反対や脱原発を声高に主張しているのを見て、反原発でもエネルギーの心配はないのだと盲信してしまう。自然エネルギーに幻想を抱かせられ、民主党がかつて十数兆円の予算は掘り起こせるといった、できもしなかった公約通りになるのは火を見るより明らか。責任のない議員(候補者?)たちを集めて原発反対を主張させる、何という巧妙な番組であろうか。

(8) 最大の矛盾は「原子力をこの国から消してしまったらどうなるか」を分析しないことである。そうやって喜ぶものは反日勢力と隣国であるのは間違いあるまい。だからこそ、真に日本を憂う者は歯を食いしばってでも原発反対勢力と戦わなければならないのである。



歴史の復讐

歴史は過去のことである。そこには「目に見えるものと見えないものがある」。原発に対しセンチメントを基に反対する人々は目に見えないものはもとより、明瞭に見えるものでさえ見ようとしなない。エネルギーが輸入できなくなったから太平洋戦争に走った事実は目に見える。ホルムズ海峡が封鎖されたら、たちまち日本は立ち往生する。これも目に見える。見えないもの、ここでは「歴史の復讐」を例に挙げたい。

一つ目は日本は、明治を実現した時、江戸時代を否定し日本人として大事なものをかなぐり捨てて西洋化に走ったこと。日露戦争(1905)に勝利し、いい気になって日中戦争(1937)に突入した。その結果、太平洋戦争を起こし原爆二発を蒙って終戦。この悲惨さは明治に江戸を抹殺したことの“復讐”と見なす歴史観。これを見抜くのは易しくないが歴史を学習すれば可能。ここには遠くない将来起きるかも知れない「目に見えない同じもの」が存在する。こういう認識が重要。日本の大きな歴史のうねりの中で、他国と全く異なった国民性を持った民族がどういう運命をたどって行くのか。

二つ目の復讐は戦後が抹殺した“戦前”からの復讐であろう。

戦後、日本は民主主義や個人主義の導入を歓迎した。戦前の良きものも悪きものと一緒に葬り去った。戦前に存在した人間として不可欠な基軸を易々と放棄した。悪平等の弊害に目をつぶり続けた。精神的基軸を失い糸の切れた凧のようになってしまい、反日新聞、日教組教育の思いのままにされてきた戦後。戦後、憲法の

果たした役割は大きいが、人々はその憲法が「日本が復讐を受ける理由」を作っていることを見るができない。戦前を否定した歴史あるいは戦前を抹殺した歴史がこれから日本に復讐し始めるのである。民主党政権を選ばざるを得なかった運命もその延長線上にある。

結語

この「目に見えないものを見るようにする工夫と努力」が、これから日本が被る悲劇を最小化できる。悲劇を最小化するのに最も有用なもの、それは原子力において他にない。原子力を最も必要としている国は世界を置いてこの日本しかないのである。その原子力を多くの日本人はセンチメントを基に捨てようとしている。そのとき歴史の復讐が急速に襲い掛かってくることを見ることのできる政治家はいないのだろうか。この当然のことが国民の代表になろうとしている候補者にはわからない。今こそ、歴史の中に目に見えない大事なものを見つけ出す。候補者の誰に、信念があり、志があり、この国の将来を真剣に憂えているか、見抜こうではないか。